



TITLE:

火星人の對話

AUTHOR(S):

杉香

CITATION:

杉香. 火星人の對話. 天界 1941, 21(245): 338-339

ISSUE DATE:

1941-10-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/168280>

RIGHT:

火 星 人 の 対 話

火星人甲 “どうだね、遊星は、君？ 何か面白い咄はないかね？”

同乙 “相替らずさ、金星ぢやあ、漸く尻尾が除れて、人間並になつたばかり、火の保たせ方がわかつて、大層好い氣になつてゐる。地球——ア、さう、コロット、控は？………オット有つたぞ、地球の人間共は金星よりもつと進んでゐる。無線電信の小口に取付いて、吾々（こつち）と——マ、吾々が爰に居ることが分れば——通信するつもりさ”

甲 “まだそんな事が判らんのかねえ”

乙 “判らんのさ、望遠顕微鏡で觀たが、此宇宙全體は専ら地球の人間共の御都合の爲ばかりに出来てると信じて居らん者はマア一人としてないんだね”

甲 “それで吾々（こつち）と通信か？！ 何の爲めにぢやらう？ 君！”

乙 “知識を吾等に授けようと云ふのさ！ 多分、あんなものを”

甲 “彼等（むかふ）に何も無けりやあ、此方から教へて遣らうぢやないか

乙 “君、君はまだ地球をよく觀て居らんネ。ドットしない見ものだが、マアこれからよく見るさ。どんな事になる？ 吾々（こつち）よりエラク成らうてんで、戰をして、命の遣取りだ。住めもせぬ兩極地方の取合ひで、此頃もやりかけて居た其二の舞さ”

甲 “冗談言ふぜ、君”

乙 “イヤなかなか、彼等（あつち）の遣り口は大方何も彼も譯の分つたもんぢやない。例へばだね、欲しいと思ふ財産はウント有餘る程作ることを知つて居乍ら、それで居て大多數は食ひ兼ねる始末。智者は世に知られないで、鈍物が通り者、生殺與奪の權を吾物顔にしてゐる奴や、百萬長者と云はれて生活手段を獨占して居る奴、學者と謂はれて一番エライものになつてゐるのさ、それに「失業病」と云ふ地球獨得の病氣にさへ悩まされて居るんだぜ”

甲 “造化！ 造化何物だ？”

乙 “自己保存の強制的抑壓さ”

甲 “シンカリせいと教へて遣らうぢやないか、君？”

乙 “駄目々々、教へたとて何が判るもんか、蟻や蜂からも學べないんだもの、地球ではそんな試みをやつて“過激派”と言はれてゐる者があるが、其例で吾等を星界の過激派なんて言ふぢやらう。だが待てよ、教はりたがつて居る事が一つある”

甲 “ハハア、電子的プロトン心理かな？”

乙 “ナンノ、ナンノ、新工夫の殺人法さ、始終そんな事を詮索してるのだぜ”

甲 “フン、いかなア、ちや如何だらう、一つ教へて遣つては！ 古い記録に澤山有るが”

乙 “面白い………だが止めだ！ マアやらして置くさ、あれで如何にか漕ぎ着けるだらうよ”
〔古いデイリー・ヘラルド紙より〕 杉香譯

臺灣の日蝕より歸りて

豫定計畫により、去九月21日の皆既日蝕を觀測するため、同17日出發、門司港にて乗船した。會員井本、飯、坂上、渡木、富谷の諸氏ならびに、藤瀬、吉田の諸氏も日蝕のため同船したので、船中大變賑やかであつた。20日基隆着。臺北の吉村、服部兩氏に迎えられ、先づ臺北に行つて、諸種の打ち合はせをし、又、JFAK より放送（録音）し、同日18時、觀測地たる富貴角燈臺に到着した。先着者既に多數あつた。直ちに觀測地點選定。同夜は諸方からの來集者約30名と懇親座談會を開いた。

愈々21日、早朝起床。一同張り切つて觀測準備に忙殺された。正午に近づく頃、來集者益々増加し、之れに放送局及び各新聞關係者を加へて、總勢約80名——空は朝少々曇り、其の後漸次晴れ上る。風は東風約6米。12時10分、初虧を首尾よく觀測。しかるに、其の後、東風に送られて積亂雲の來往繁く、漸く觀測の希望淡らぎ、一同悲觀。遂に濃雲に妨げられたまゝ13時41分に皆既は始まつたが、蝕甚の前後から3〜4回雲が淡らぎ、立派なコロナを見ることが出來た。寫眞を撮つた人もあるが、此等の成績は少々怪しいと思ふ。さて生光は確實に觀測し、ダイヤモンド・リングは立派だつた。其の後、雲は依然として去らず、15時7分の復圓は結局見えなかつた。

自分は、(1)時刻の觀測、(2)コロナ外形と黃道光の撮影、(3)皆既の經過の活動寫眞による撮影をプログラムに組んでゐたが、(1)は半ば成功、(2)は駄目、(3)は可なり成功した。——他の人々も大體同様。但し、眼視觀測者は可なり立派な收穫を得た模様である。自分は生光直後に現地放送をした。

觀測終了後、直ちに器械を片付けて、一同相前後して臺北に引き上げ、翌22日、市の公會堂で、臺北支部主催の座談會があり、22時過ぎまで多數來會者が歡を盡した。——それから、23日基隆から乗船、26日早朝田上に歸つた。

今回の觀測については、臺北支部の吉村昌久氏始め會員各位の絶大なる斡旋奔走により、實に豫期以上の成功を獲たことに關し、滿腔の謝意を表する次第である。

(1941—9—28. 田上天文臺にて、山本一清)